

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02610

研究課題名(和文) スベトラナ・アレクシエーヴィッチの文学の研究 - 「証言」が「文学」に変わる時-

研究課題名(英文) A study on Svetlana Alexievich's Documentary Literature

研究代表者

安元 隆子 (YASUMOTO, Takako)

日本大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40249272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：スベトラナ・アレクシエーヴィッチの「小さき人々」の証言を集めた文学について、特に『戦争は女の顔をしていない』『最後の証言者たち』『アフガン帰還兵の証言』『チェルノブイリの祈り』を取り上げ、その多声的テキストを分析考察した。その結果、そこにはアレクシエーヴィッチの戦争や核に反対する強い意志が介在し、それが証言集の構成やその証言を統括するエピグラムの導入などに反映されていることが明らかになった。アレクシエーヴィッチの作品が単なる証言集に留まらず文学となり得ているのは、こうした証言の積み重ねによって「物語」を創生していることによるという結論に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スベトラナ・アレクシエーヴィッチの作品はドキュメンタリー作品と呼ばれるが、ジャーナリズムの分野でのドキュメンタリーではなく、文学作品として成立し、読者に深い感動を与える。それはどうしてなのかを調査、考察した。その結果、証言という断片的なものを有機的に並べ替え、エピグラムの導入などを用いて「物語」を創り出していることを明らかにした。このようにアレクシエーヴィッチの作品のメカニズムを詳しく解明する試みはこれまでなされておらず、本研究はアレクシエーヴィッチ研究の嚆矢となる。

研究成果の概要(英文)：For the Svetlana Alexievich's literature works by the citizens people's testimonies, I picked up and analyzed the polyphonic text, especially "War's unwomanly face" "The Last Witnesses" "Zinky Boys" and "Voices from Chernobyl". As a result, it became clear that there was a strong will to oppose the war and nuclear power of Alexievich, which was reflected in the composition of the testimonies collection and the introduction of the epigram that symbolizes the testimonies. It was concluded that the reason why Alexievich's works can become the literature, not just a collection of testimonies, is that the story is created by accumulating testimonies.

研究分野：文学

キーワード：スベトラナ・アレクシエーヴィッチ 証言 ドキュメンタリー 独ソ戦 アフガン戦争 チェルノブイリ

1. 研究開始当初の背景

2011年の福島原発事故は日本人にとって大きな衝撃だったが、世界では既に1986年に人類未曾有のチェルノブイリ原発事故が起きていた。我々はチェルノブイリをどのように受け止め文学に表現していたのか関心を持ち、チェルノブイリ原発事故を巡る文学について研究した。その過程で出会ったのがスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『チェルノブイリの祈り』だった。証言集だが文学としての光彩を放つ本作を読み、証言が文学として認められるのはどのような創作のメカニズムによるものなのか、関心を持ったことが本研究の背景である。

2. 研究の目的

名もない小さき人々の証言集を文学と化すスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの創作のメカニズムを解明することが本研究の目的である。その際、アレクシエーヴィチが示唆を受けたというアレシ・アダモヴィチの文学や、これまで行ってきた2011年の3.11東日本大震災の際の証言集研究との比較も踏まえてアレクシエーヴィチの文学の特色を明らかにする。その上で、既発表5作品についての分析考察をまとめ、それぞれの作品論を執筆する。

3. 研究の方法

- (1)モスクワのプレミア社から2013年に刊行されたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの著作集5巻をテキストとして、初出からの改訂過程を追いながら作者の意識の変遷を追う。
 - (2)その際、証言集の構成方法(章立てや証言の並べ方、切りとり方、エピグラムの使用など)や、作品世界への作者の登場の仕方などに注目する。
 - (3)また、独ソ戦、アフガニスタン戦争、チェルノブイリ原発事故、社会主義国家・ソ連の崩壊という各々の作品の時代的社会的なコンテクストについて、市民レベルでの実態を調査する。
 - (4)日本語翻訳刊行の際に生じた原作との改変の意味を探り、翻訳の功罪を明らかにする。
 - (5)以上を踏まえ『戦争は女の顔をしていない』『最後の証人たち』『亜鉛の少年たち』『チェルノブイリの祈り』『死に魅入られた人々』『セカンドハンドの時代』の作品論を執筆し、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ論としてまとめる。
- 尚、独ソ戦とチェルノブイリの悲劇の実態を実感するために、フィールドワークを行う。また、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチへのインタビューを試み、論の執筆に役立てる。

4. 研究成果

- (1)『戦争は女の顔をしていない』
これは独ソ戦に参加した女性兵士たちの証言集である。
この著を読み解くキーワードは「二つの現実、二つの心」であることを指摘した。「個」と「集団」、「私」と「国家」というように分裂する志向性を同時に生きざるを得ない、または生きることを強制されたソ連軍女性兵士の苦悩を掬い上げたのが本著であることを明らかにした。
戦場においても、戦後の生活においてもこの苦悩は続くが、そうした苛酷な体験の証言の中に、この二つを統一するものが含まれていることも指摘した。それは敵味方を超えた人間愛の発露を見る場面であり、また、暴力に対し暴力で応戦するのではなく、自らの信じる愛を貫くことを以て抵抗する姿、また、凌辱されようともこれ以上の死を見たくないと云ってソ連軍兵士を訴えることをしなかったドイツ人女性など、「愛」と「許し」がこの著に地下水脈のように流れていることを浮き彫りにした。また、それらを統括する証言として、「戦争を殺しにここ(ベルリン)まで来た」という証言を提示した。究極のテーマは戦争否定に行き着くことを示唆した。
独ソ戦当時のスターリンの独裁体制への懐疑と反発を明らかにした。独ソ戦当時はソ連の硬直化した体制批判を表現することはできなかったが、女性兵士たちの証言の中にこの体制批判が存在することをアレクシエーヴィチが見逃さなかったことを指摘し、この点について、同じく女性狙撃兵として英雄視されたローザ・シャニーナの記事と比較検討しながら述べた。また、この体制批判と人々の意識の覚醒は、後の『チェルノブイリの祈り』に通底するものであることも指摘した。

(2)『最後の証人たち』

- これは独ソ戦の時、子どもであった人々の証言集である。
初出では「失われてしまった子ども時代」が主人公としてまとめられているが、2013年の著作集の段階では、初出に見られたような大人の感覚を持たざるをえなかった子どもの眼から見た心象の描写は捨象されていることを指摘した。これは子どもであっても大人の眼を持ち、大人のような眼を通して見た世界や戦争の光景を語る状態から、あくまでも子どもの眼を通して見た子供の感性が捉えた戦争を描くことにアレクシエーヴィチが固執していることを明らかにした。そして、それは本著の副題が「子どもたちの話ではない本」= (大人のような子どもの話)から「子どもの声のための独唱曲」に替えられたことと重なることも指摘した。その際、アレクシエーヴィチは、子どもたちの声は一人一人独立したものでありその声の集積を目指したと考えられ、そのために初出では存在した序文を著作集では普遍的な事実とドストエフスキーの言葉に置き換えることによって作者・アレクシエーヴの影を消し、子どもたちの声だけを響かせようとしていることを明らかにした。
子どもたちの眼を通して描かれた戦争の特色として、「色彩」表現が多用されており、特にナ

チス・ドイツの兵士や蛮行は「黒」のイメージで捉えられていること、そして、それに対置する形で鮮やかな赤やピンク色が記憶の中に点在していることを指摘した。

本著に登場する子どもたちは「見る」だけの存在であり、反撃に出る存在ではないことを明らかにした。それを知っているかのように、ナチスは蛮行を見ることを彼らに強要する。子どもたちはその蛮行を見、その細部を克明に記憶しそれを再現している。つまりこの著の子どもたちにとって「見る」ことが彼らの唯一の存在証明であり、存在意義であることを指摘した。そして、それはアレクシエーヴィチが師と仰ぐアレシ・アダモヴィチ原作の映画『来たりて見よ』（邦題「炎628」）に共通するものであることも指摘した。

子どもの眼から見た戦争は現実の臙化と共に微かなヒューモアを生むことを指摘した。と同時に、過酷な現実の中で垣間見えた人間の愛や連帯を記憶し、それをアレクシエーヴィチが取り挙げていることを明らかにした。この部分の存在が本著を歴史そのものでなく文学にしているのだと結論付けた。

「最後の証人たち」というタイトルは、「あの過酷な実態を証言できるのは私たちが最後になってしまう、語らなければならない」という、「見る」ことから「語る」ことへの独ソ戦当時子どもであった証言者たちの決意を表していることを指摘した。とすれば、邦題の「ポタン穴から見た戦争」はアレクシエーヴィチの意を充分組んでいないことになり、日本語翻訳版の証言の並べ方が時間系列に並べ替えられていることの問題点を明らかにした。

冒頭の証言は、こうした「見る」ことから「語る」ことへの意志を象徴的に表現するものとして、著作集では証言の前後が付け加えられている事実を指摘した。そして著作全体の構成も、冒頭の証言と末尾の証言とが呼応しており、「語ることへの意志」が表明されていることを明らかにした。

(3) 『亜鉛の少年たち』

これはソ連のアフガニスタン侵攻の際に派遣され帰還したソ連兵の証言と家族の証言集である。

なぜ兵士たちがアフガニスタン侵攻に志願したのかを、多出する「国際主義」と「南部国境防衛」の語をキーワードに歴史的事実を検証した。換言すれば、ソ連の共産主義拡充と国土の死守がこの二つのスローガンに凝縮している。こうした背景を持ちながら、兵士たちを突き動かしていたのは祖国への愛であったことも確認した。

しかし、アレクシエーヴィチが描こうとしたものは、兵士たちのアフガニスタン戦争への懷疑と覚醒であり、それは「卑劣」「恥」「不名誉な戦争」という言葉に象徴されていることを指摘した。そして、この戦争の背景にあったソ連中枢部の混沌を歴史的に確認した。

戦争の責任は追及されたが帰還兵の傷ついた心身はそのまま後遺症として残されていたことを当時の新聞報道などから改めて浮き彫りにした。しかし、末尾に置かれた証言には、集団や国家に惑わされることなく「真実」を見つめる目をもつこと、それを「個」が引き受けることへの決意＝「覚醒」が述べられていることを指摘した。

露語タイトルの「亜鉛の少年たち」には、国家の威信を保ち国民の戦争肯定の心情を保つために国家と棺の空洞部分を隠そうとしたソ連への告発を指摘し、それはアレクシエーヴィチの道程の中で初めて顕著に可視化され、この後の作品に継続発展していくことを指摘した。

本著において戦争に参加した当事者以外の、つまり、その家族の証言も取られていることを指摘した。また、構成に於いて、作者のエピローグ（著作集ではプロローグ）があり、作者の存在がこの著では明示されている。但し、証言者の氏名・職業、軍での階級等はまとめて示されている。全体としては、3部構成で聖書の書き方を彷彿とさせ、また、エビグラムには証言の発表を妨害しようとする勢力との葛藤が示唆されている。ここには証言者との間の隠れた「物語」が内在していることを明らかにした。そして、その「物語」にはアレクシエーヴィチの思想が投影されていることを指摘した。

この証言集の発表の仕方についての証言者とアレクシエーヴィチの葛藤を裁判記録から具体的に検証した。アレクシエーヴィチと証言者の間にはドキュメンタリーを巡る意識の違いがあることが判明した。証言を事実そのものとしてアレンジせずに掲載するのがドキュメンタリーと考えるか、否か、である。アレクシエーヴィチは、虚構化はしていないが、事実とその場の空気までも取り入れるという。こうした見解の違いが裁判に至る事態を生んだ。しかし、このようなプラスアルファの存在こそが文学とドキュメンタリーの境界を形成していることを明らかにした。そして、アレクシエーヴィチに欠けていたのは個人の人権侵害に対する繊細さであることも付加した。

(4) 『チェルノブイリの祈り』

これはチェルノブイリ原発事故を巡る人々の証言集である。

チェルノブイリ原発事故の記憶は戦争と重ねられていること、それは独ソ戦だけではなく、チェチェン戦争、タジキスタンの内戦など、新旧いくつかの戦争の記憶と重なっていることを指摘した。こうした時間軸に加え、空間軸としては、死の象徴としてのチェルノブイリ原発を中心に、生と死が入り混じった半径30km以内のゾーン、そして、ゾーンの外の生の世界といった図式が認められることを示した。

チェルノブイリ原発の放射能被害を人々が正確に核被害として捉え、ヒロシマと重ねて理解していることは注目すべきであり、そして、核被害を身体的具体的な影響だけではなく、人的な

精神的被害を中心に述べていることは現代の福島とも共通していることを指摘した。

『亜鉛の少年たち』に顕在化した、ソ連への盲信への懐疑と決別、集団から個として生きることへの覚醒が大きな水脈となって本著の中に流れていることを指摘した。

本著の構成として、小さな証言をまとめた章を作るなど、これまでにない工夫が凝らされているが、なかでも、冒頭と末尾に同じタイトルの「孤独な人間の声」を置いた点が顕著であり、そこに「生命」を宿すことによって「愛」を継承していこうとする人間の姿が呈示されていることを指摘した。

これまでの著作では序文やあとがきに作者が顔を出していたが、本著に於いてアレクシエーヴィチ自身がインタビューを受ける存在として他の証言の中に並置している点を指摘し、アレクシエーヴィチの創作のメカニズムの深化が認められることを明らかにした。

(5) ソ連崩壊を巡る著作『死に魅入られた人びと』『セカンドハンドの時代』について

ソ連崩壊の政治的、経済的状況について資料を収集し、状況を再確認した。また、市民の生活レベルでの混沌状況をロシア人に取材した。

ソ連崩壊後の市民を描いたワレンチン・ラスプーチンなどの文学と比較し、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの世界を検証、現在、論文執筆中である。

(6) 「証言が文学に変わる時」について

日本の3.11東日本大震災際の証言集、そして、北方領土からの帰還者の証言集などと比較し、証言を統一する作者の存在が顕著であり、作者の思想が地下水脈のように流れていると考える。その思想とは、究極的には戦争や惨事を超えた人間の愛だといえる。人間の愛のすばらしさや人間同士愛し合うことを説いている。その主張が時間的には断絶した一つ一つの証言を結びあい、一つの方向に読者を導いている。具体的方法としては証言の構成(章立て)に負うところが大きい。また、エピグラムの使用などにより、断絶した一つ一つの証言をその思想に辿り着くように物語を形成する方法がとられていることがわかった。証言集自体の改訂も行われ、削った証言の部分の添加や順番の並び替えなどが頻りに試みられていることも明らかにした。そして、作者(証言を編集するアレクシエーヴィチ)の影をできるだけ取り除く方向に向かっていることも判明した。以上がスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの証言を文学に変える方法であると結論付けた。

(7) フィールドワークとスヴェトラナ・アレクシエーヴィチへのインタビューについて

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの著作に登場する独ソ戦に深くかかわる都市、ミンスク、ブレスト、ボルゴグラード、サンクトペテルブルグなどを訪問し、戦争記念館や記念墓地等を巡ることで歴史を肌で知ることができた。特にナチス・ドイツの生きた村人を焼殺したという蛮行の舞台となったハティニ村を訪問できたことは、独ソ戦の惨劇を実感として理解することができた貴重な体験となった。また、チェルノブイリ原発事故後の現在の原発30km内のゾーンの状況も視察し、モスクワのリクビダートルたちの眠るミチノ墓地を訪問したことも作品を理解する一助となった。そして、ブレストからバルト三国を巡ったことで、バルト三国の人々にとってソ連がいかに脅威であり、侵略者として嫌悪する存在だったのかを知ることができた。逆の立場から見たソ連を実感できたことは、アレクシエーヴィチの文学理解にも大きな助けとなった。

2019年3月にミンスク滞在時にスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの自宅に招かれ、しばし、その文学について語り合うことができたことは、大変な収穫となった。証言集のまとめ方の深化に対する私の考えを述べ、それに対して賛同の意を表していただいた。また、疑問点を率直にお聞きし、論に活かすことが出来た。最も記憶に残っていることは開口一番、日本の状況について問われたことである。彼女が再来日した際に表明した「日本には抵抗の文化がないのではないか」という疑念が質問に込められていたのであろう。信念を曲げることなく国家と静かに対峙する作家との対談は、私のスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ理解の大きな助けとなった。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 15号
2. 論文標題 スベトラーナ・アレクシエーヴィチ『亜鉛の少年たち』論 隠蔽された「真実」の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際文化表現学会	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 38巻2号
2. 論文標題 スベトラーナ・アレクシエーヴィチ『最後の証人たち』論 「見る」ことから「語る」ことへ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国際関係研究』	6. 最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 37巻1号
2. 論文標題 スベトラーナ・アレクシエーピッチ『戦争は女の顔をしていない』論	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国際関係研究	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 37巻2号
2. 論文標題 「記録としての証言から文学へ チェルノブイリと福島、2つの原発事故をめぐる言説」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際関係研究	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 16号
2. 論文標題 スペトラーナ・アレクシエーヴィチ『亜鉛の少年たち』の裁判を巡って ドキュメンタリー文学についての考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際文化表現研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----